

転生したら旦那様が未来の魔王様だったので転生チートで快樂堕ちさせて世界の平和を守ります！

〈出会い・初夜〉(シルヴィア(16)×ダリウス(18))

本邸の大広間——高い天井にはシャンデリアが輝き、壁には家族の肖像画がずらりと並ぶ。

その中央に、若き魔術師が慎重に足を踏み入れた。

「……ダリウス・フェインです。よろしく……」

声はわずかに震える。周囲に並ぶ侍女や使用人たちが、一瞬視線を向ける。

その瞬間、少女が大理石の階段の上から降りてくる。  
長い金髪を揺らし、華やかなドレスを身に纏った16歳の美しい令嬢は、堂々たる態度で彼を見下ろした。

「今日くる私の玩具って、あなた？……ああ、間違えた。玩具じゃなくって、『ダンナサマ』だったわね」

低く響く声に、広間の空気さえ震える。  
ダリウスは思わず足を止め、全身が硬直した。緊張から汗がじわりと滲むのがわかる。数本の黒髪が頬に張り付く感覚が不快だった。

シルヴィアは扇子を開き、ゆっくりと彼の胸元を指でなぞるようにして嗤う。

「覚えておきなさい。あなたは私の所有物。そしてあなたの仕事はただ1つ……私を、退屈させないことよ」

周囲の人々は気まずそうに視線を落とす。

この屋敷の主——この家の令嬢——の命令に抗える者など誰もいない。

ダリウスはその力の前に、ただ震えるしかなかった。

「ふふ……仲良くしましょうね、ダンナサマ」

シルヴィアの笑みは冷たく、意地悪で、そして——どこか妖しい美しさに満ちていた。

—————

コツコツと靴底を鳴らしながら、1人の少女が美しい金髪をひるがえしながら足早に廊下を歩いていく。

その表情は先程の堂々としたものとは違い、酷く焦っていた。

普段の少女をよく知る者が見ればそんな「らしくない様子」に体調不良を疑われるかもしれない。……いや、あの家族の事だ、「おや、まるで魂でも取り替えてきたみたいだね？随分『オンナノコ』らしくなったじゃないか」と小馬鹿にするように笑われるだろう。

それ程、この「シルヴィア・ド・エルダリエ」という少女は自信家で、傲慢で、冷徹で、完璧だったのだ。

少女は自室に入るなり乱暴に扉を閉め、鍵をかける。そして崩れ落ちるようにその場に座り込み、呟いたのだった。

「これ乙女ゲームに転生しちゃってるよね……！！??」

少女は焦っていた。

とんでもなく高い壺を割ってしまった後の悪ガキと同じ位焦っていた。

察しのいい方は既にお気づきだろうが、この少女、転生者である。

しかもただの転生者ではない。よくある転生チート持ちの転生者である。転生特典とかいうやつだ。

女はこの世界に生まれ落ち、現代日本で生きた記憶を持ちながら、な一ろっぱ的な世界ですごい偉いけど一族の性格が捻れすぎで有名なヤバ貴族の末娘としてハチャメチャな教育を受けつつ破天荒に生きてきたのである。

女は理不尽な理由で若くして死んでしまっていた。

そのせいで開き直ったかは知らないが、2度目の産声をあげ、目の前に執拗に出され続ける乳首に根負けして吸い付き、羞恥心を殺しながら「これは理不尽早死に人間専用のボーナスステージ的なやつね。神様ありがとー」と非現実的な出来事を非常に前向きに受けいられていた。

そのため、真っ当な大人ならば接触禁止令を出すような、そんな子供の教育に悪すぎる親族に囲まれてとんでもない内容の教育を受けていても「なるほどこういう世界ね。おっけー」と、現代日本でせっせと育んだ倫理観を台無しにしながら日々を生きてきたのだ。

だって所詮オマケの人生だ。真面目に生きてあんな理不尽に終わらせられてしまったのだから、オマケの中でくらい欲望のまま過ごしたっていいだろう。

女はそんな気持ちで今まで好き勝手してきたのだ。この身体は可愛いし、魔術とやらが使えるし。完全にゲーム内のアバターを動かす気分でも過ごしてきた。

……そんな少女が何故ここまで焦っているのか。

それは、先程顔を合わせた「ダンナサマ」が、女が死ぬ前とてつもなく入れ込んでいた乙女ゲーム内の「最推し」だったからである。

ダリウス——本名をダリウス・ド・エルダリエと言う——という男はふたなり女総攻めという異色の成人向け乙女ゲーム、「ラプソディ・オブ・ダークネス」内に出てくるラスボス様だ。ちなみにファンの間では「ダリ様」と呼ばれている。

このダリ様、「黒髪で産まれてきたから不吉」というただそれだけの理由で家族や周囲から疎まれ、やべー高位貴族のやべー位性格が終わってる娘の玩具として、そしてていのいい厄介払いとして婿入りする事になる。

婿入り後は人間として扱われず、さらに酷い扱いを受ける事になる。味方は1人も居ない、逃げ場もない、そして希望もない。そんな日々の中で、ダリ様の人外じみた量の魔力に釣られた悪魔がダリ様を唆すのだ。

「人間を辞め、魔物の王となり世界を支配しよう——お前を傷付けた奴らはみんな、魔物の餌にしてやれば良い」

そうしてダリ様は悪魔と契約し、人間を辞めて魔物の王になったのだ。ちなみにこの時ダリ様は自分に悪さした人間のみならず、視界に入った人間全て殺していったらしい。さすがラスボス、殺意が高い。

主人公は仲間を集め、大量の魔物をぶち殺してレベリングをし、最終的にダリ様を倒す事を目的として冒険を進めていく——というのがゲームの大筋だ。

前世で、女は一目見た瞬間にダリ様の虜になった。ビジュがあまりにも好みすぎたのだ。

黒曜石を思わせる漆黒の髪は彼のミステリアスさを演出していて、その前髪の隙間から覗く瞳はぴかぴかのトパーズの様だ。射抜くような鋭さを放つ目を縁取るまつげは影を落とすほどに長く、たっぷりとしていて、儚さと力強さの間で絶妙なバランスをとっていた。

鼻筋はすっと通っていて、薄めの唇がきゅっと不機嫌そうに引き結ばれてるのがセクシーだ。

そんな何処か儚さがある涼し気な顔がしなやかで男らしい肉体の上に乗っかってるのがたまらない。

女は「そんな彼が情けなく喘がされているところを見たい！！」という気持ちでいっぱいだったが、なんとダリ様は攻略対象では無かったのだ。

ゲーム内ではストーリーテキストの端々にダリ様の弱点や過去の匂わせが入るのみで、スチルなんて最終決戦時に数枚見れるだけである。

女は泣いた。ダリ様のスチルを見るためだけに、主人公にモーションをかけてくる攻略対象達には目もくれず最短効率でレベリングをしてボス戦に挑んだ。乙女ゲームなのに。

戦闘中にちまちまうごくダリ様を見るために戦闘シーンをできるだけ引き伸ばしたりした。回復薬をありったけ買って、じわじわダメージを与えてBGMの合間に挟まるダリ様のボイスをできるだけ長く堪能できるようにした。「うっ」「ぐあ……っ」等のダメージボイスを喘ぎ声だと思い込み「つまり戦闘中はセックス中という事では…？」と勝手に興奮したりもした。

戦闘終了後、ストーリークリアのエンドロールを眺めながら正気に戻ってしまった時はちょびっと泣いてしまった。何故好きな男の濡れ場が見れないのか。きちんとお金を払ってエロゲをプレイしているというのに、なぜ推しのセックスシーンを自家発電しないといけないのか。この世は理不尽である。女は悔し涙を流しながら二次創作をした。

女はダリ様が大好きだった。少し歪んでいたかもしれないが、深く深く愛していた————16年前は。

「あれたぶんダリ様だよな……！？やたら好みの男だなあとは思ってたけど、あのゲームのラスボス様よね！？なっつかし……懐かしすぎて思い出すの遅れちゃった……」

そう、16年。16年経っているのだ。強制的に推しを摂取できなくなっ  
てから16年の月日が流れているのである。

剣と魔法のあるな—ろっぱ的な世界に転生したという超ビッグイベントがあったり、濃すぎる親族によるトンデモ教育を悪ノリしながらマ

ルっと受け入れたりしながら16年も生きていれば、あれ程好きだった男の記憶だとしても薄くなるのは仕方が無いと言える。

そんな日々の中で「おまえの『体質』の事もあるしな……」と16歳のお祝いに私の好きにしている人間を旦那としてあてがってやると両親から伝えられ、ノリノリで教育の賜物である悪女ロールプレイをしてお迎えした男がまさか推しとは思えない。

「ぜ～ったい嫌われた～！！第一印象最悪すぎる……！！将来的に殺される……！！ここから上がる好感度ってある！？今から入れる保険ってありますか……？？？」

少女はガックリと項垂れた。

今まで蔑ろにしてきた倫理観が「ほーらみろ」と後方腕組彼氏面をして呆れているのが見える。

「うっ、うっ……」と涙をぽろぽろ流しながら落ち込む少女の姿は少し可哀想だと思わなくはないが、何もかもが自業自得すぎるため何も言えない。

しばらく床の上で落ち込んでいた少女だったが、立ち直ったのかその場ですっと立ち上がり、己に言い聞かせるように言葉を紡ぐ。

「いや、逆に考えるのよ私。どうせ殺されるんだからイイ思いしないと損よ……死ぬほど見たかったダリ様のえっちなスチルが生で見放題のチャンスなんだから……」

「えっちスチルを隅々まで網膜に焼き付けてから死んでやる！」と鼻息を荒くしながら決意するシルヴィアの姿は、どこまでも残念だった。

—————

——僕は、生まれた瞬間から間違っていた。

母の腕に抱かれた記憶はほとんどない。あるのはただ、冷たい視線と、押し殺した吐息。

「黒い髪をした子供は魔に近い」

この国に古くからある迷信が、僕のすべてを決めてしまった。

父は僕を見て顔をしかめ、母は目を逸らし、兄弟たちは僕を玩具のように殴りつけた。

泣いても、叫んでも、誰も助けてはくれない。

抱きしめてくれるはずの手は、いつも僕を突き放した。

だから僕は学んだ。

感情を見せてはいけない、と。

喜んでも、悲しんでも、怒っても、すべて否定されるのなら初めから心を閉ざしてしまえばいい。

そうして育った僕は、感情の出し方すらわからなくなった。

「生きている」よりも「生かされている」という言葉のほうが近い。

けれど、ひとつだけ救いがあった。

——魔術だ。

僕の中に溢れる異様なまでの魔力は、誰も否定できない才能だった。

それを扱うたび、ほんの一瞬だけ、僕は存在を許される気がした。

だが同時に、その力すら「不吉さ」の証として忌避された。

結局のところ、僕はどこにも居場所を得られなかったのだ。

そして今日。

僕は婿入りという名目で、エルダリエ家に差し出された。

家族はほっとした顔をしていた。まるで厄介な荷物をようやく手放せたと言わんばかりに。

胸が痛んだ——いや、痛むはずの場所に、何も感じなかった。

僕は最初から家族にとって「息子」ではなかったのだから。

そうして辿り着いた先で、彼女に出会った。

シルヴィア・ド・エルダリエ。

黄金の髪を持ち、氷のように冷たい笑みを浮かべる令嬢。

彼女は僕を見下ろし、唇に毒を含ませてこう言った。

「今日くる私の玩具って、あなた？……ああ、間違えた。玩具じゃなくって、『ダンナサマ』だったわね」

普通ならば、屈辱でしかない言葉。

けれど僕には、それが奇妙に甘美な響きを持って届いた。

僕の存在を、彼女は「自分のもの」と呼んだ。

今まで誰からも拒絶され続けてきた僕にとって、それは初めて与えられた「位置」だった。

所有物であってもいい、玩具であってでもいい。

「お前はここにいていい」と告げられたように感じてしまったのだ。

こんな風に考えてしまうのは、まだ決定的な暴力を受けていないからかもしれない。

「エルダリエ家の血は、狂気の香りに満ちている」と言うのは有名な話だ。

屋敷に着いた瞬間から、いつ死んだ方がマシだと思ふような目にあうのかと怯えながらも、彼女の言葉が頭にこびり付いて離れない。

恐ろしい女だ。

彼女は強く、美しく、傲慢で、残酷だ。

その一挙手一投足に、僕の心は翻弄される。

なのに、なぜか目を逸らすことができない。

怖い。けれど——惹かれてしまう。

今夜、その女と同じ寝台を共にする。



未知の行為が待っているのだろう。  
羞恥か、痛みか、辱めか。  
想像すればするほど、胸がざわめき、呼吸が乱れる。  
逃げたいと思うのに、足は動かない。  
扉の向こうで彼女を待っている時間が、何よりも恐ろしく、何よりも待ち遠しい。

なぜだろう。  
僕はずっと愛を求めてきたはずなのに。  
与えられるのが愛ではなく、歪んだ所有欲や残酷な戯れであっても——それでいいと思ってしまう。  
いや、それでしか僕は救われないのだ。

どうか彼女に見てほしい。  
どうか僕を壊してほしい。  
彼女に縋らなければ、僕はまた「誰にも必要とされない子供」に戻ってしまう。

恐怖と期待と依存が絡み合い、胸の奥で渦を巻く。  
今まで何も感じられなかった心が、こんなにもざわめいている。  
——ああ、これが「生きている」ということなのだろうか。

重苦しい沈黙の中、部屋に立ち込める蠟燭の灯りだけが揺れていた。

刻一刻と夜が深まる音——壁の振り子時計が刻む律動が、やけに耳につく。

その一秒ごとに、心臓が軋むように痛んだ。

——カチリ。

小さな音が、張り詰めた空気を断ち切った。  
扉の鍵が外れる音。

背筋が凍りつき、全身の毛穴が開く。

ああ、来た。

握りしめた拳が湿っている。いつからこんなに汗をかいていたのだろう。

呼吸が浅くなり、喉が渇き、唇が震える。

恐怖か、期待か、それとも両方か。

ああ、逃げてしまいたい。けれど、逃げてはならない。

——逃げ場など、最初からないのだ。

扉がゆっくりと開いた。

流れ込む冷たい夜気と共に、彼女が現れる。

金の髪は蠟燭の灯を反射して、光の輪を作り出す。

豊かなドレスの裾が床を滑り、彼女の歩みに合わせてわずかに揺れた。

その瞳は、燃えるように冷たく、それでいて甘美な毒を湛えている。

その存在感だけで、僕の心臓は跳ね上がった。

「待たせたかしら、ダンナサマ」

低く囁く声が、胸を抉る。

恐怖が喉までせり上がるのに、声にならない。

否、声にしてしまえば、彼女の前で醜態をさらすことになる。

それだけは嫌だ。僕を突き放してきた家族のように、彼女にも軽蔑されるのが怖い。

——なのに。

どうしてだろう。

彼女の声聞いた瞬間、胸の奥底で「ようやく来た」と安堵している自分がいた。

壊されることを恐れているのに、壊してほしいと願ってしまう。  
彼女の視線が僕を捕らえた瞬間、僕は確かに「存在」になれるから。

シルヴィアが、ゆっくりと近づいてくる。  
寝台が軋み、彼女が腰を下ろした瞬間、現実が一気に重みを持つてのしかかる。  
その香りに、吐き気にも似た眩暈がする。  
けれど嗅ぎたくて仕方がない。

逃げ道はない。  
もう後戻りもできない。  
恐怖と期待と渴望と依存が、ぐちゃぐちゃに混ざり合って、胸を締め付けていく。

——今夜、僕は彼女に壊されるのだ。  
そのことを、心のどこかで甘美に受け入れている。

—————

ダリ様、めちゃくちゃ怯えてる……

そりゃそうだ。ファーストインプレッションが最悪すぎた。好きな男の怯えきった姿が可哀想と思う気持ちと、あのラスボス様が子猫のように可愛らしく震えててえっちだなと思う気持ちの2つが毎秒ガチンコ勝負をしている。

ぎゅっと強く握られた手を取り、手を開かせる。少しでも緊張がやわらぐようと揉み込んでいけば、ダリ様は怯えと困惑が混じった顔でそれを見つめた。

「……あなた、生命線が長いわね。長生きするわよ」  
「それ……は、ありがとう、ございます」

彼の手のひらを指でなぞりながら、アイスブレイクの意を込めてそう言えば途切れ途切れな返事がくる。

……話題選びを失敗したかもしれない。あんまりにも立派な生命線に「流石ラスボス様だ～将来的に人間辞めるもんな～」の気持ちがぽろっと出ただけなのだが、「お前の苦しみは長く続くからなハハハ」的な意味で受け取られていないだろうか？

更に怯えさせてしまっていないか、と彼の顔を見れば完全に困惑した表情をしていた。

あ、ふつうにスベっただけね。純粹に「何言ってるんだこいつ」と思ってるだけか。……くそっ、悪女ロールプレイ期間が長すぎてまともな対人コミュニケーションがド下手くそになってる……！！

嫌味や悪意抜きで話せる事が無さすぎてうっかり占い師になってしまった。おもしれー女枠に入れるならばそれでも良いのだが、ダリ様の反応的に私は「おもしれー女」ではなく「やべー女」である。悲しい。……いや、ダリ様が初めほど怯えなくなったのでヨシとしよう。

彼の手のひらをむにむに触っていた手を止め、今度は目の前の質素なシャツの下に手を差し入れて素肌に触れる。室内は適温に保たれているはずだが、その肌は汗でしっとりと濡れていた。

「ねえ、洗淨魔法はつかえる？」

「は、い」

「じゃあ自分でお腹の中……いいえ、腸の中身が空っぽになるくらい洗える？」

「……っ！」

「私、内臓の中身でベッドを汚したくないの。わかるでしょ？あなたも汚物を撒き散らすなんて事、嫌よね？」

私は大の方のスカトロはあまり好きじゃないのだ。エロゲ世界の男という事である程度アナルのエロ穴化補正はあるとは思うが、念には念をいれておきたい。

別に私がやってもいいのだが、「人に突っ込まれる為の準備を自分でやってる推しが見たい！」というファン心というか、欲が出てしまった。

腹筋のおうとつを楽しみながらそう聞くと、何を想像したのか彼は体を硬直させ、顔から色を無くして「はっ、はっ、はっ」と息を浅くさせる。

彼の手をお腹まで誘導させて遠回しに急かすと、ビク、と肩を跳ねさせてから弱々しく術式を練り始めた。

途切れ途切れにぼそぼそと紡がれる詠唱を聞きながら、手伝う気持ちでぶるぶると震えるダリ様の手を固定するようにぎゅうっと握った。

「は、はあっ、はっ」

「……終わった？」

「っ、あ、おわ、おわり、ました」

「そう。よくできました」

よしよしと労うように腹を撫でると、彼の喉がひゅうひゅうと狭く鳴り、まるで小さな獣の悲鳴のように洩れた。

「ひ、ひっ……く、はあ……っ、ひゅ……っ」

彼の肩が不自然に上下して、唇が白くなっていくのがわかる。しまった、過呼吸だ。

素肌に触れていた手を離して、両手で彼の頬を包むように触れる。そして「……落ち着いて」と、囁くように声をかけた。

彼の瞳は恐怖と戸惑いに揺れていたが、その揺らぎを私はじっと見つめた。

「大丈夫。息を吸って、ゆっくり吐くの……いち……にい……さん……  
吸って、吐いて……ふう……」  
「は、はあっ、ひ、……く、はっ……、」  
「そう、じょうずよ……吸って……吐いて……」  
「は……、ふ、は……、は……」

ある程度息が整ったのを確認してから、私はベッドサイドにある2つの水差しの中の、『絵がついている方』を手にとってコップに注ぎ入れる。

「落ち着いたかしら？」

そう言って手元のコップを差し出せば、「はい……」とか細く返事をしながら受け取り、無色透明のそれに口をつけた。

彼の喉がこく、こく、と上下する。

「……安心しなさい。今日は初めての夜だもの。痛いのは無しよ」

中身が空になったコップを受け取り、ベッドサイドに置きながらそう伝えと、ほうと小さく息を吐く音が聞こえた。

……本当に痛い事はしないので安心してほしい。  
此方としては、それはもうどろっどろのでろんでろんに甘やかすつもりなのだ。だって前世から切望していた推しの初夜だぞ？推しのえっちなスチルが生で見放題ですってなったなら、そんなの真っ先に快樂でとろとろぽやぽやになったスチルが見たいに決まってるでしょうが！！

私は興奮から荒くなりそうな鼻息を必死に抑え、顔がだらしく緩みそうになるのを16年間の悪女ロールプレイで鍛えられた表情筋で制御しながらにっこり笑う。

「それじゃあ、服を全部脱いで横になれる？」

「ん、ふ♡、んう」

くち、くちゅ、とローションが泡立つ音が室内に響く。

彼の後孔が私の2本の指をずっぷり飲み込んでから、そこその時間が経っていた。

そろそろ良いだろう、と3本目の指を突き入れれば増えた質量に驚いたのかナカがきゅうと締まって、目の前の性器がふる、と小さく震える。

痛みは無いかと彼の様子を伺えば、顔をとりけさせながら必死に喘ぎ声を嚙み殺そうとしていた。めちゃくちゃえっちだ。此方は1枚も脱いでないのに、向こうは全裸でふうふう喘いでいるというのが大変えろい。

真っ白な肌は興奮から赤くなっていて、程よく筋肉のついた胸は呼吸する度上下している。何もせずともしっかり立ち上がった可愛い乳首に触れると、その度に大きな体を震わせて可愛い声を聞かせてくれるのが最高に楽しい。

まだまともに性器に触れていないというのにここまで敏感になってくれるとは、全くもって媚薬様様だ。市販ではなく自作した物だったが、しっかりばっちり効いてくれて良かった。

「ふ♡、っあ！、？な、！？」

「ふふ、イイ所に当たった？ここ、いっぱい可愛がってあげると女性みたいに気持ちよくなれるんですって」

「おっ♡、あ♡♡、いや、いやです、うう”～ッ♡♡♡♡、いやだ、こわ、あ”あ……ッ♡♡！？」

「だいじょうぶ。怖い、じゃなくて気持ち良いって言うのよ？ほら、気持ち良い、気持ち良い……」

「あ……ッ♡！、ふ♡、きも、ちい……ッ♡♡、きもちい、い”～ッ♡♡♡♡」

「上手ね、ダリウス。ご褒美にここ、ぎゅうって押してあげるわね」  
「あ♡、は♡♡、あ”あ”あ”.....ツツ♡♡♡♡！」

程よく筋肉のついた身体をビクビク震わせて喘ぐダリ様可愛い～～  
♡♡

これだよこれこれ前世見たかったのはこれですよ公式さん！！当時は戦闘時のダメボを喘ぎ声だと思い込んで興奮してたけど、やっぱり本物の喘ぎはレベチだ。興奮しすぎて頭がぐらぐらに沸いてる。えっちすぎて鼻血でそう。

余裕綽々で言葉責めモドキをしているようにみえる私だが、実際は理性が飛かける度に年季の入った悪女ロールプレイがオートで発動しているだけである。生の推しやばい。えっちすぎてしんどい。ちんこがイライラする。

そろそろ良いだろうと3本の指を美味しそうに食むアナルから指を抜けば、引き止めるかのようにナカの肉が指にまとわりついた。

「ふ♡♡、あつ、ん.....♡？」  
「.....ふふ、ふ♡」

痛い程に勃起上がった自分のモノの先っぽを、ひくひくと収縮するアナに押し当てれば「はやくはやく」と急かすようにちゅむちゅむと吸い付く。焦らすように2、3度程浅く抜き差ししてから、「どちゅんツツ♡♡♡」と深く突き入れた。

「は♡、ああ”あ”あ”~~~~.....ツツ♡♡♡♡♡！、?!？」

「は、.....最っ高♡」

「あ♡♡、え、♡？は.....♡♡??」

「ふ、ふふ♡混乱してる顔もかーわい.....ね、ダリウス。この結婚、おかしいと思わなかった？」

「うッ♡、ふ.....♡♡！、う.....♡♡??」



たつぷりと水分を含んだトパーズの瞳が、私の真意を探ろうとじっと見つめてくる。

なんとか快感をやり過ごし、快楽に浸った頭で一生懸命考えようとしている姿が可愛らしくて思わず頬を撫でると、それすらも気持ちいいらしく、小さく身体を震わせてナカの肉棒を「きう♡」と食い締めた。

「んっ……、我がエルダリエ家の人間は総じて性根が腐っていると有名だけれども、ちゃあんと偉い『お貴族サマ』なのよ。その末娘である私に、貴方のような身分の婿をあてがうなんて、それこそ天地がひっくり返る位有り得ないの。お父様達は私の玩具として貴方を連れてきたけれど、ただの玩具でいいなら使用人にするなり奴隷にするなり、他に方法があると思わない？……ねえ、なんで自分が『ダンナサマ』になったか、わかる？」

「う……、シルヴィア、様が……普通の貴族と、結婚できない……事情があった……？」

「大正解♡」

「ひ……っ、あ、ああ……ッ♡♡！？」

ご褒美に前立腺あたりを「とちゅ♡、とちゅ♡」と突いてやれば、突然の快感に混乱しながらも可愛らしく鳴く。

「稀に男性器と女性器の両方を持つ人間が産まれるのはご存知？ふたなりと言うのだけれど、私みたいなのはえら〜いお貴族サマの中では歓迎されないの」

「ん、あ♡、あう♡♡」

ゲーム内の主人公ちゃんは平民で、セックス1本どっこいしょでお妃様にまで上り詰めるルートもあったけれど、多分主人公補正が働いてるんだと思う。

平民がどうだか知らないが、貴族の中ではふたなりに対してあまり良い感情は向けられない。

そんな中、我がエルダリエ家はイカれた人間しか居ないという事もあり、ふたなりである私にも上の兄達と同じ様扱ってくれた。

しかし私を嫁に出し、嫁入り先の家にふたなりがバレて舐めた態度をとられるのは癪に障るとの事で、今回ダリウスがドナドナされたという訳である。

先程も言ったように本来なら婚姻なんて絶対に有り得ない程身分が離れて居るが、ウチが魔術師の家系で、そしてダリウスが黒髪で優秀な魔術師の素質がありすぎるという事もあり、これは良い言い訳ができるぞと今回の結婚の話になったのだ。

「そこらへんの貴族と普通に結婚したらふたなりがバレてうちの家が舐められるし、一生結婚しないならしないで行き遅れの娘が居るからと舐められるし.....まあ、今回の結婚はそういう事よ」

「ふっ、あ♡、う”う～～.....ッ♡♡♡」

「はあ♡、かわい.....ふふ、せっかくできた『ダンナサマ』だもの。大事に、だ～いじに可愛がってあげる♡」

そう言ってにっこり微笑めば、ナカが「きゅん♡♡」と甘やかにちんこ全体を抱き締めてきたので、それをお強請りだと受け取って、浅い所への責めを辞めて「ぐうっ♡♡」とさらに奥まで突き入れた。

-----  
「あー.....っ♡♡！、あ、あ.....！」

熱が、体の奥深くからじわりと溢れ出す。呼吸は浅く、荒く、胸の奥で高鳴る鼓動が全身に響き渡る。意識は霧のように揺らぎ、理性は遠くに追いやられ、残るのは快樂の奔流だけだった。

触れる彼女の指先、吐息、視線——その一つ一つが僕の体と心を捕え、全てを支配していることを、身体が知っていた。

「ん♡、ふう♡♡、うっ.....♡、ぐ、」

「奥も好き？.....ふふ、気持ち良いとこいっぱい覚えて、お薬無しでも今みたいになれるように練習しましょうね.....♡」

「あ♡♡、は、は、」

微かな痛みや羞恥心さえ、快楽に溶けて甘く変換される。初めて味わう感覚に、恐怖も期待も、抗う力もすべて霞み、ただ蕩け、陶醉に浸る。体は自ら動かず、少女の熱に縛られ、全身が熱の奔流で満たされる。

頭の中は混濁し、思考は断片的になる。それでも、奥底には微かに残る恐怖が、甘美な快楽と絡み合い、心に複雑な層を作る。自分の体が完全に彼女の掌握下にあることを、陶醉の中で知りながらも、その圧倒的な力に依存している自分を意識する。

肌に触れる熱、吐息のぬくもり、鼓動の重なり——すべてが脳内の快感を増幅する。理性は押し流され、快楽が思考を侵食するほど、少女への依存が深まる。縋りつきたい、甘えたい、抗えない衝動が全身を支配し、快楽の渦に身を任せる自分を受け入れるしかない。

「ああ、いけない。『ダンナサマ』との初夜なのにキスもまだだったわね」

「う……♡、あ、んむ♡♡、ちゅ、ふ♡♡、んう♡」

「ん、む……ふふ、キスは好き？もっと欲しい？」

「ん♡♡、すき♡、すき、い”い”～～……………ツツツ♡♡！」

「あは♡、お腹の上、もう精液びちゃびちゃになってるのにまだ出るの？」

「あ♡♡、は♡、う……♡♡♡？」

「んふふ、わかんないか♡」

羞恥心もまた、甘く蕩ける。見つめられる瞳、指先の熱、初めて触れられる感覚——そのすべてが僕を揺さぶり、心と体を引き裂くような陶醉を生む。未知の熱に翻弄されながらも、僕は確かに彼女の愛に触れている幸福を知る。誰にも向けられたことのない独占的な愛。それが恐怖や不安さえも甘く変え、陶醉に変換する。

全身の感覚が快楽に溶け、呼吸はさらに荒く、体は波打ち、心は熱に蕩ける。理性の残骸がかすかにざわつくが、それすらも快楽の波に飲まれ、抗えない依存心と陶酔が交錯する。僕はもはや僕ではなく、少女の世界に溶け込み、ただ彼女に身を委ね続ける存在となった。

「ずっとほったらかしにしてるコレも、そろそろ触ってあげなきゃね♡」  
「あ”ッ♡♡！？、あっ♡♡！、お”っ♡、いやだ、つよ、お”ッ♡♡、あ”あ”あ”あ”～～～.....ツツツ♡♡♡♡！！！？？」  
「わあ♡、女の子みたいにイッちやった？.....ふふ、よくできました。いい子、いい子.....♡♡」

この時、恐怖も期待も羞恥も、すべて快楽に包まれ、僕は初めて完全に誰かに依存する陶酔を知った——世界の全てが、彼女の掌の中で光り、僕の存在はただ一つ、彼女に属していた。